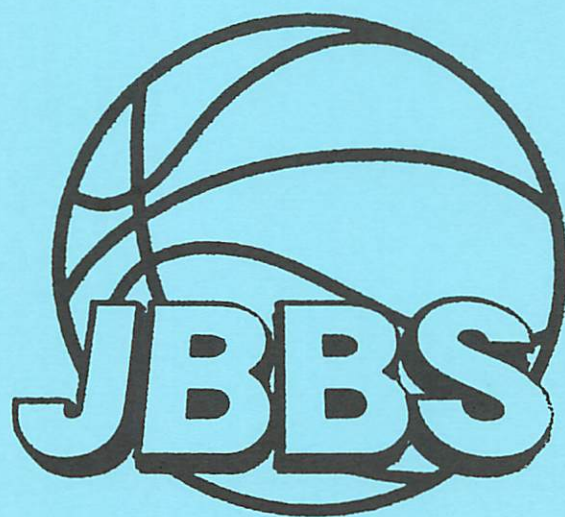


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:53



2012年2月

NPO法人 日本バスケットボール振興会

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレイヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7

目 次

- 秋の講演会・交流会を開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
日本協会専務理事 樋口隆之氏 講演
- 「東日本大震災」被災地復興支援
第 8 7 回天皇杯・第 7 8 回皇后杯 全日本総合選手権大会終わる・・・・・・ 7
- 「東日本大震災」被災地復興支援
J X－ENEOS ウインターカップ 2 0 1 1・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 2
第 4 2 回全国高校選抜優勝大会結果
- 女子 U－1 6 日本代表アジア選手権大会優勝・・・・・・・・・・・・ 1 6
- 1 2 月 2 1 日はバスケットボールの日・・・・・・・・・・石井 一生・・・・ 1 8
記念日イベントを開催
- 会員だより
5 0 年の時を経て韓国景福高校を訪問・・・・・・・・・・鈴木 進吾・・・・ 2 1
「松本幸雄と『籠球研究』（昭和 9 ～ 1 1 年）・・・・及川 佑介・・・・ 2 5
－日本バスケットボール史の一齣－」出版にあたって
- 書籍紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・石井 一生・・・・ 2 6
「松本幸雄と『籠球研究』（昭和 9 ～ 1 1 年）
－日本バスケットボール史の一齣－」
- 女子日本代表チーム新コーチングスタッフ・・・・・・・・・・・・ 2 7
- 新リーグ参加チーム公募開始・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 8
- J B L レギュラーシーズン後半戦へ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 9
- W J B L はセミファイナルプレーオフへ・・・・・・・・・・・・ 3 1
- b j リーグは中盤戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 3
- 訃報・追悼文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 5
- プラザ こぼればなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 9

秋の講演会・交流会を開催

日本協会専務理事 樋口隆之氏 講演

[編集部]

毎年恒例となっている講演会ならびに交流会は、11月26日東京お茶の水会館で開催された。折りしもインカレ開催中であつたが、今年度から日本協会専務理事に就任された樋口隆之氏にご多忙の中お越しいただき「これからの日本のバスケットボールについて」講演いただいた。

樋口隆之氏プロフィール



1946年 東京都出身 65歳
1969年 東京教育大学卒業
1969年～ 日本鉱業選手
1982年～84年 日本鉱業ヘッドコーチ
1988年～ 日本実連理事
1991年～ 日本協会理事
1995年～ 日本実連理事長
2011年～ 日本協会専務理事

<樋口専務理事講演概要>

今年度から専務理事を仰せつかりましたが、暫くバスケットボール界から遠ざかっておりましたので新入社員のような心境です。振興会の皆さんには日頃日本協会へのバックアップとご協力をいただいていることに感謝申し上げます。

最初に世界の情勢からお話をしてみたいと思います。FIBAでは2003年に事務総長がパトリック・ボウマン氏に代わってから変革が進んできております。オリンピックや世界選手権について世界を六つのブロック（大陸）に分けて各大陸ごとに代表チームを割り振り、それぞれのブロックの中で更に地域ゾーンを設けて予選を行う方式としました。

アジアでも東アジア、西アジア、中央アジア、東南アジア、中近東と五つのゾーンとなり日本は中国、韓国、チャイニーズタイペイなどと東アジアゾーンに属しています。したがってアジア選手権大会もフリー参加ではなく、各ゾーンで予選を勝ち抜いたチームが参加できるというようになり、日本が属する東アジア大会も重要な位置づけとなりました。オリンピックや世界選手権大会に出場するためには、予選となる各種地域ごとの国際大会から参加しなければならない状況です。

つい先週FIBAの全体会議に参加してきましたが、世界から40カ国ほどが集まって2016年のリオデジャネイロ・オリンピックの後、世界のバスケットボールをいかにしてもっと発展させるのが首題となりました。

その中で多く出された意見はFIBAの世界選手権、オリンピック、各ブロック大会をはじめとするスケジュールが各国とも国内大会などと輻輳し日程的にどうにもならない状況にある、ということでした。これらを打開するためにサッカーでいうワールドカップのような大会をイメージしながらFIBAの大会を組み直してはどうかという議論もなされました。

現在世界的な大会として、オリンピックは12チームの参加枠、世界選手権は16チームの参加枠ですが、新しいワールドカップのやり方として全部で32チームの参加枠とし、参加する各国でホーム and アウェイ方式による試合を展開するという構想です。

FIBA加盟国は自国のバスケットをいかに盛んにするのかといった問題を抱えており、特に代表チームが自分の国内で公式国際ゲームをなかなか開催できないという悩みは共通のようです。東アジアゾーンをみると、中国や韓国、チャイニーズタイペイなどホーム and アウェイによる試合は、距離的にも近い場所で公式国際ゲームが開催されることになり、観客や代表チームにとってもそんなに費用がかからなくて済みます。

ただし国際ゲーム数が増加することによって代表チームの選手構成に新たな問題が発生することが心配され、サッカーのようにリーグ戦の最中でも代表選手を確保できる制度に移行する必要性が生じます。

各国とも国内で公式国際ゲームが開催できるとなればテレビ放映を始め国内のファンにアピールできる機会は増えますが、一方では選手の確保など検討しなければならない問題も含んでいます。

FIBAでは以上のことにつきまして男子を想定しており、女子については当面現行のままと考えられます。

今年日本における国際ゲームは男女とも3ゲームずつでしたが、どこの会場も満員の状況でした。代表チームの国際ゲームを見られる機会が増えるということは、ファンにアピールする場が多くなり、それがバスケットボールの発展につながるということです。

今、日本の世界ランキングは男子が33位、女子が15位で、アジアにおいてもトップになっていません。男子の場合32チームによるワールドカップが行われるとすると、ランキングから見ると出場はぎりぎりのところだと思われますし、世界的にみてやや低いレベルのアジアでも勝てないということについては日本のバスケットボール界全体で検討し、何としても打開しなければならない課題と云えます。

一方U-18やU-16といったアンダーカテゴリーの国際大会も多くなっていますが、日本はこれらの大会においてはアジアでも好成績を残し、ここには将来に向かって明るい材料もあります。特に若いうちから国際ゲームを経験することは将来の強化につながるものと思います。

このような情勢の中で日本の現状をみますと、エンデバー計画による若いうちからの育成強化に努めてきたことが、最近のアジアにおける大会の成績をみると確実に成果を上げてきていると思われます。

しかし課題もあります。ひとつの例として小学生のバスケットをみてみますと、これまではバスケットボールが体育の正課として取り入れられていましたが、今後はそれがボール競技へと変更になるようですし、先生方についてもバスケットを知らない方が多くいて、なかなか指導が行きとどかないところもあります。更に中学へ進むと高校受験の準備や指導者不足による影響などで、バスケットを楽しむと云う環境から遠ざかっていく子供たち



が多くなっていく可能性があります。

また、現在指導者として日本協会に登録されている方は約1万2千名ですが、若いころから正しくバスケットを教えていくためには、この数を3万名から3万5千名にまで引き上げるべく専門的指導者の育成が必要だと考えます。

その上でエンデバーは、今一度日本バスケットボール界全体で再検討しなければならない課題といえましょう。

世界的にみるとバスケットボール選手の身長が高くなっていて、男子では身長が180センチ程度の選手はもっぱらガードのポジションですが、日本の多くのチームでは大きい選手としてセンターなどインサイドのプレーばかり教えられて育てられます。

良い素質を持ったプレーヤーでもインサイドのプレーばかりしては、成長してからオールラウンドのプレーを要求してもなかなかできるものではありません。ミニのとき180センチ程度の選手は将来2メートルくらいに伸びる可能性が大きいですが、2メートルのプレーヤーはアウトサイドからでもシュートを決められ、インサイドでもプレーできるオールラウンドプレーヤーになる必要があります。過去アメリカが圧倒的に強い時期がありましたが、最近ではヨーロッパ勢が台頭して世界的にも強いという印象を与えています。これとても各プレーヤーがオールラウンドでプレーし、2メートル以上のプレーヤーがアウトサイドからのシュートやドライブインをなんなくこなす、というプレースタイルが普通になってきています。

これまで日本は平面的で速いバスケットを目指して強化してきましたが、このやり方は国際的にだんだんと通用しなくなってきました。長身プレーヤーを含めてインサイド、アウトサイドを問わずオールラウンドでプレーできるスタイルが最近の世界的な流れになっていることとディフェンスの工夫によって速いバスケットが止められてしまっているからです。

長身プレーヤーを含めた日本のオールラウンド化は、女子では15歳くらいまで、男子では18歳くらいまでを対象として年代ごと、特にトップエンデバーをその対象にした強化に努め、それらの指導者層についてもきちんと討議し、教育、育成、強化の組合せを一貫させ、育成に何が必要なのかも再検討し、国際的に通用する選手を育てていかなければなりません。

日本人特有の緻密さという面ではまだまだ世界に誇れるところもあり、精神面、技術面、フィジカル面を含めて若いうちから強化する素材作りは今年度から早速取り組む考えです。

今まで日本協会は財団法人として運営してきましたが、来年度に向けて公益法人化申請を提出いたしました。公益法人になりますと都道府県協会が主体的傘下となっていれば株主的な存在となり、評議員会は執行部を否認する権限も出てきますし、現在77名の評議員数も都道府県協会、各連盟、少数の学識経験者などで60名位に減ることになります。

世界的に通用する代表チームのレベルアップとともに、大切なことは底辺を拡大するバスケットボールファミリーの充実だと思います。現在日本協会の登録人数は約62万人ですが、実際にバスケットをやっている方々はもっと多いと思いますので、更に登録人数を増やしてファミリーの拡大を図るべきです。

本当に強い日本を作るためには都道府県協会を主体とした底辺拡大と、全体が納得できるような強化策を実現することが大事で、強化についても昔からいろいろと議論されてきましたが、それが絵に画いた餅ではなくて具体性ある施策とすることが重要なことだと思

います。

今日本協会の年間予算は約12億円で10年前の5億円と比べれば良くなっており、強化費についても1～2億円から4～5億円に増えています。しかし環境が良くなってきているのに結果が出ないことにつきましては遺憾に思っています。

ただ年間予算的にみればサッカーの100億円程度に比べればバスケットはまだまだであり、底辺拡大と事業強化によって充実させなければならないと考えております。

最近の大きな課題は言うまでもなく新トップリーグの立ち上げです。今専門機関を設けて新リーグ立ち上げを進めていますが、基本的な方向性は一致しているものの具体化となるといろいろな障害がでているのは事実であり難しい問題もはらんでいます。しかしながら何とかこれを2012年中に意見一致して2013年には具体化しなければなりません。

新トップリーグが出来ればメディアなどの対応も変わってくると思われますし、成功すれば日本のバスケットボール界が発展の方向へ向かうと確信します。

メディアにアピールする対策を図った結果、今年度の全日本選手権大会でNHKにはBSを含めて準々決勝や準決勝からテレビ放映をしていただくことになり、これまでの男女決勝戦のみの放映という状況からかなり前進しています。

これというのも新リーグの発足を含めたバスケットボール界の発展を期待されてのことではないかと思っています。

日本のバスケットボールを将来へ向かって発展的な方向に進めたいと思いますので、是非とも皆さん方のご協力をお願いしたいと思います。



交流会

講演会に続いて開催された交流会には樋口専務理事をはじめ会員多数が参加し、バスケット談義が繰り広げられた。



「東日本大震災」被災地復興支援

第87回天皇杯・第78回皇后杯

全日本総合選手権大会終わる

[編集部]

1月1日から東京体育館で開催された首記大会は3日に会場を代々木第一および第二体育館に移し、5日以降代々木第一体育館にて合計男女62試合が行われ、1月8日の女子決勝戦、1月9日の男子決勝戦をもって幕を閉じた。

今回の大会においては昨年暮れの高校選抜大会に続いて、東日本大震災の被災地復興支援を大会名に掲げて募金活動が展開され、著名選手やスタッフが連日募金箱を持って義援金を募った。この大会で集まった義援金は合計1,137,890円で被災地のバスケットボール協会へ贈られる。

会期中いくつかの話題がマスコミに取り上げられ、またNHKのテレビ放映が全部で10試合と従来と比べて大幅に増え、ファンにとって見応えのある試合も多かった。

すなわち男子では千葉ジェッツがbjリーグチームとして初参戦して3回戦まで勝ち進みJBL7位のレバンガ北海道と対戦する一方、女子では神奈川県立金沢総合高校が高校生としては49年ぶりにベスト8に進出したことなどが挙げられる。

しかしながら試合ではこれからの課題も多々見られた。男子においては2Pシュートやフリースロー成功率の低さが目立ち、女子では力の差が著しく一方的な展開になって、観客の興味を殺ぐような試合があったことなどである。日本代表チームが国際舞台でよい成績を上げるには、国内最高峰の大会といえるこの選手権大会で、もっと充実した試合内容であって欲しいものであり、参加する各チームのレベルアップと奮起を期待したい。

更に審判についても問題がないわけではない。試合中ゲームコントロールが出来ないような状況がみられ、また判定がチグハグになるなど悪いところが目立つ。反省すべきは反省して次に備えていただきたいものである。

男子天皇杯

男子でベスト8に残ったのはいずれもJBLチームであり、学生陣の食い下がりが期待されたが青山学院大学、拓殖大学、天理大学、東海大学の4校が3回戦まで勝ち進んだもののそこでJBLチームに歯が立たなかった。学生チームは、若さを武器に走るバスケットを目指して食い下がったが、JBLチームの外国人選手に阻まれてインサイドのプレーが思うようにいかないのみならず、リバウンドを支配されてしまっていたことが痛い。

JBLチーム同士が戦った準々決勝ではリーグ戦で上位のチームが順当に勝ち準決勝へ駒を進めた。

準決勝はトヨタ自動車対パナソニック、アイシン対日立的対戦となり好ゲームが期待されたが、いずれも優勝への執念を燃やしたトヨタ自動車とアイシンが快勝して決勝戦へ進出した。

決勝戦では第1ピリオドでアイシンがリードしたが、今期アイシンから移籍した竹内公輔選手を擁するトヨタ自動車が第2ピリオド開始早々猛攻によって逆転し、前半で12点

リードし、後半一時アイシンに詰め寄られたがそのまま逃げ切った。トヨタ自動車は文字通り全員バスケットで攻守ともに踏ん張り、アイシンの5連覇を阻止、5年ぶり2回目の優勝を飾った。

<男子の結果>



女子皇后杯

女子については外国人選手がいなかったためか話題性に富んだ試合が多くみられた。それは若いチームの台頭である。大阪人間科学大学が3回戦でWJBLの新潟アルビレックスを下してベスト8に進出、高校生チームの神奈川県立金沢総合高校がやはり3回戦で社会人トップの秋田銀行を破ってこれまたベスト8に勝ち残ったのは立派。

長い間金沢総合高校前身の富岡高校時代から同校を指導してきた星沢監督は、この大会をもって引退するとのこと、公立高校でも全国制覇するなど数々の功績を残しての引退が惜しまれる。

ベスト8には上記2チームのほかはWJBLの6チームが進出し、JX、シャンソン化

粧品、デンソー、トヨタ自動車が準決勝へ進んだ。

準決勝ではデンソーが第3ピリオドまで6点差のビハインドを第4ピリオドに猛攻の末逆転に成功、トヨタ自動車を下して始めて決勝へ進んだ。この試合、デンソーのセンターで日本代表選手にも選ばれた高田選手は32点を上げる大活躍で、インサイドプレーは勿論のこと速攻でも得点をあげるオールラウンドのプレーで勝利に貢献したことが目立った。

決勝戦はJX対デンソーの試合となったが、デンソーはJXの厳しいディフェンスにあってリズムをつかむことが出来ず、前半でダブルスコアの22点差となるJXの一方的な試合となった。

JXは4年連続17回目の優勝を飾ったが、どの試合でもJXのディフェンスは他チームとは比較にならないほど厳しい。メンバーが交替してもディフェンスだけは力を抜かない試合展開であり、バスケットの試合でディフェンスがいかに重要であるかのお手本を示したかのようであった。

<女子の結果>



表彰式

男女とも決勝戦終了後表彰式が行われ、優勝チーム準優勝チームの表彰とチーム強化のための奨励金が授与された。また3位の2チームに対しても準決勝戦が終わった際に表彰が行われ、同じく強化奨励金が贈られている。強化奨励金は優勝チーム500万円、準優勝チーム200万円、3位チーム100万円で平成22年度から贈呈が始まっている。



写真提供 JBA

大会ベスト5

この大会で最も活躍した選手男女5名が大会ベスト5に選出され、個人表彰が行われた。大会ベスト5は下記の通りだが、男子の竹内選手と桜木選手、女子の大神選手、渡嘉敷選

手、吉田選手は昨年に続いての受賞で、変わらぬ活躍の裏には各選手とも普段のトレーニングの努力があってこそであり、称賛の拍手を贈りたい。

男子

竹内 公輔	(トヨタ自動車アルバルク)
リッチー・フィリップ	(トヨタ自動車アルバルク)
伊藤 大司	(トヨタ自動車アルバルク)
柏木 真介	(アイシンシーホース)
桜木ジェイアール	(アイシンシーホース)

女子

大神 雄子	(J Xサンフラワーズ)
渡嘉敷 来夢	(J Xサンフラワーズ)
吉田 亜佐美	(J Xサンフラワーズ)
高田 真希	(デンソーアイリス)
矢野 良子	(トヨタ自動車アンテロープス)

大会を振り返って

本誌では昨年この大会終了後、大会をよりよくするためにマスコミ経験者や学識経験者を招いて、大会を振り返る座談会を開催しその内容を掲載したが、今回の大会運営においては観客の入替え制を廃止するなど、改善されたところも多かった。

しかし冒頭でも述べた通り、今度はオンザコートで見苦しい場面がたびたび出てしまったのは残念である。審判およびその運営（特別の判定に対する説明がないなど）に問題があるのは勿論だが、ベンチで指揮をとるヘッドコーチがたびたび判定に文句を言う態度も反省して欲しいものである。

更に男子におけるシュート確率をみると、準決勝、決勝の3試合平均で、2Pシュート46%フリースローでは64%である。厳しいディフェンスにより無理なシュートが多く、低得点のゲームとなったことが原因と思われるが、少なくとも2Pシュートでは70%以上、フリースローでは90%以上であって欲しい。

日本代表チームに名を連ね得る選手達なのだから、厳しいディフェンスに遭っても楽にシュートが打てるようなオフェンスプレーを取得して、国際試合で当たり前のシュート確率向上に向けて更なる努力をお願いしたい。フリースローの確率が低い故にファウルゲームになりやすい一面もあり、試合の興味を失う結果につながるのだから。

また、大会のトップチームによる準決勝以降でも、1ゲームで70点以下の得点しか上げられないチームが多く見受けられた。24秒ルールにより両チームそれぞれが80点台以上で勝敗を競うことこそ、バスケットボールゲームの醍醐味ではないだろうか。トップチームのスタッフおよび選手の奮起をお願いしたい。厳しいディフェンスが無理なシュートを誘い、その成功率を落として低得点になっている現状を是非とも打破して欲しい。

女子のベスト5に選ばれたデンソーの高田真希選手の話が目立ったが、決勝戦ではJXに徹底的に抑えられフリースローもなかった。日本代表選手の若手ホープなのだからチームプレーだけでなく、自分で積極的に攻めてバスケットカウントのファウルを貰うくらいの気概を見せて欲しいもの、更なる進化を期待したい。

以上

「東日本大震災」被災地復興支援

J X－ENEOSウインターカップ2011

第42回全国高校選抜優勝大会結果

〔編集部〕

首題の大会は昨年12月23日から東京体育館で開幕、最終日29日まで連日相変わらず圧倒的な人気を集めて熱戦が繰り広げられた。

開幕早々の23日から25日までは4コートで並行して8チームが対戦するということもあり一時入場制限を行うほどの観客で、東京体育館は上階席まで満員の状況であった。野球の甲子園に匹敵するほどの人気は、出場校地元の応援と試合に臨む高校生がひたむきにプレーする姿をひと目見ようというファンが多いことを裏付けている。

大会は男子の九州延岡学園が大差で勝ち進む一方、女子は準々決勝以降の8チームが接戦を演じ、それぞれ会場を盛り上げた。

選手としては下馬評に上げられた香川尽誠学園の渡邊雄太選手が、192cmの身長ながらオールラウンドのプレーで観客を魅了した。

女子も180cmある札幌山の手の高岡萌子選手と神奈川県立金沢総合の宮澤夕貴選手が日本代表選手としての力量を見せた。

28日の女子決勝戦では昨年度優勝し高校三冠を達成した北海道札幌山の手高校が日本代表の高岡選手の活躍を武器に勝利を収め、29日の男子決勝戦では本年度高校総体で優勝した九州宮崎県の延岡学園高校が、2メートルを超える留学生1名のエントリーが認められなかったにも拘わらず、身長差とスピードある全員参加のプレーで、毎試合を圧勝して史上5校目の高校三冠を果たした。

関係する皆さんが指摘されるように、男子では2メートル、女子は190センチの選手でもオールラウンドのプレーヤーに育って欲しいものであり、長身者を指導される方々におかれては念頭においた指導方法をお願いしたい。

男子

決勝戦での延岡学園は、香川県の尽誠学園に食らいつかれたが、留学生を擁して身長差をいかに発揮し、ペイントエリアを大幅に支配して88対55で勝利を収めた。決勝戦のみの数字データをみても延岡学園が、2Pシュートでは43%対33%、リバウンドで57本対42本といずれも尽誠学園を上回っている。

敗れた尽誠学園は日本人選手だけのチーム編成で、中でも渡邊雄太選手の活躍が光った。2回戦で留学生がいるシード校福岡第一を破り、準々決勝では京都洛南に1点差で勝利した。渡邊選手は準決勝でも留学生を含む沼津中央高校との試合で20得点を上げ、前半16点のビハインドを除々に詰め、第4ピリオド残り2分に逆転し5点差で勝利を収める原動力になった。

一昨年のこの大会で日本人選手だけで戦った仙台明成高校が優勝しているが、高校生においては留学生がいないチームでもやりようによっては勝ち進めることを尽誠学園が再度示してくれた。



写真提供 JBA

女子

女子決勝戦は札幌山の手が80対73で山形市立商業を下し、昨年大会に続いて2連覇を達成した。高校生で日本代表選手に選出されている札幌山の手の名岡選手(180cm)が大活躍、国際舞台を経験しているだけあって競り合いに強く、決勝戦では実に39得点を挙げチーム総得点のほぼ半分を叩き出している。

山形市立商業も主力の大沼選手が28得点、加藤選手が22得点の活躍をみせたが、それ以外の選手が振るわず涙をのんだが、最後まで強者札幌山の手と競り合ったのは立派。

決勝戦のシュート確率をみると、2Pシュートでは53%対46%、フリースローでも41%対37%で札幌山の手がわずかに上回っていて、この差が勝敗を左右したと言っている。

また、往年優勝常連の桜花学園高校は準決勝で優勝校の札幌山の手高校に3点差で惜敗したが、その前の準々決勝ではインターハイ優勝校の神奈川県立金沢総合高校とシーソーゲームの末6点差で勝利している。U-16日本代表選手でもある馬瓜エブリン(180cm)を擁し、主将の三好南穂選手(167cm)の好リードと得点能力により優勝して当然と思わせる素晴らしいものであった。桜花学園高校はチームとしてのみならず選手それぞれの今後の成長が楽しみである。

指導される井上眞一先生におかれては、今後も世界に通じる多数の日本代表選手となるプレイヤーを育成していただけるよう、更なる注力をお願いしたい。



写真提供 JBA

DUPER®



WE ARE A SPECIALIST IN BASKETBALL GOODS.

DUPER FIVE CO., LTD.
3-5, TATEKAWA 3-CHOME, SUMIDA-KU, TOKYO 130-0023 JAPAN
TEL. TOKYO 03(3632)7045 FAX. TOKYO 03(3632)8327
URL: <http://www.duper.co.jp> E-mail: info@duper.co.jp



センター街メイン通りは、

BASKETBALL STREET

となりました。

渋谷センター街では、スポーツ振興と青少年の健全育成を基本理念に、国際色・ファッション性を考え合わせ、通りの名を「バスケットボールストリート」と命名。

5年、10年とかけてこのバスケットボールストリート、通称「バスケ通り」を定着させていきたいと考えています。



バスケットボール ストリート



渋谷センター街